

News Letter

International Office in Agriculture

<http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/>

国際交流 一私の経験から一

高藤 晃雄

[農学研究科教授]
[地域環境科学専攻]

留学生や招聘外国人研究者をお世話することになるといつも、もう約35年以上も昔の、私が大学院生として過ごしたカナダトロント大学時代のことが脳裏をよぎる。京大で修士を終えてトロント大学動物学科の博士課程に入学したのは1969年7月のことである。当時は1ドル360円の時代で、今のように格安航空券などはなく、羽田-トロント間の片道運賃は17万円であった。それから約4年半後に京大助手に採用してもらったときの初任給の手取りが7万円少しだったと記憶しているので、貯金がゼロだった学生にとって航空賃はすいぶん高かった。

トロント大学での私の指導教授は学部長で超多忙な人だったから直接会って話が出来るのは月に2-3度、しかもせいぜい15分ずつくらいが限度だった。その代わりに、当時その先生の弟子で今の日本のポストドクに近いlecturerの人が親切に面倒を見てくれた。空港まで迎えに来てくれ、その夜はその人の両親宅で泊めてもらい、当面必要な物は用意してくれており、翌日からはアパート探しから買い物まで、一段落するまでつきあってくれた。今、逆の立場になって、京大に来られる外国人をお世話するのはそれなりに大変で、ときにはかなり負担に感じることがある。しかし、その度に、初めて外国に出た私ともを親身にお世話いただいたその方には頭の下がる思いになる。

当時、私の専門である生態学や昆虫学の分野において京大はカナダやアメリカに決して引けをとらない水準にあった。従って留学するといっても非常に目新しいことを学ぶわけではなかった。振り返って、留学したことで得た物は必ずしも専門分野に関するものとは限らない。敢えていうなら、異文化とそれほど苦勞せずにつきあえる手段と心構えが身についたということだろう。それは私のその後の人生ですいぶん大きな財産となっている。

京大に来られる外国人研究者が不平に感じることは、講義や日常生活の中で学生の反応がつかめないことにあるようだ。このようなつきあい下手はなにも学生に限ったことではないと思うし、そういう印象は我々日本人教員が日常的に感じるものでもあり、必ずしも英語の問題だけに起因するものでもない。ただ、「国際化」ということが今、教育・研究上の重要なキーワードであるはずなのに、今の若者（学生に限らず）の一部はある意味で国際性を身につける意欲に欠けているのではないかと思われる。たしかに、一昔前と異なり、お金を払ってもらって国際研究集会には多くの若者が参加するし、国際誌に投稿する若い人達は我々の頃と比べて格段に増えているはずである。数年前に私の研究室にいた院生の一人が初めて書いた論文を見て、彼のすぐれた英語力には舌を巻いた経験がある。また、在学中にはそぶりも見せなかったが、海外経験が全くないのに彼の話す英語も一流であることを後で知った。センスに恵まれていただけでなく、どこかで努力していたはずであろう。しかしこういう学生はむしろ異例ではないかと思う。私は、今の若者が国際的センスを持つものと持たないものの両極端に分化し、後者のほうがはるかに多いのではと思っている。なぜ、国際性に関心を示さない人がこの時代に多いのだろうか。おそらく日常的にその必要性を感じる機会が少ないことも一因だと思う。アップルパソコンが出始めた頃のバージョンは英語表示であった。だからpaste, editなどの用語を誰でも自然に身につけたが、今ではすべて日本語表示である。Newsweekやスポーツ、芸術などのジャーナルでも日本語訳が出ている。外国の映画でも上手に日本語をしゃべってくれる。国際空港のショップでも日本語ですむことが多い。私はカナダに4年半いて、書く英語はなんとかなる程度になったが、家では日本語を話していたので話す英語はあまりうまくはならなかった。50歳になってから国際学会の評議員になったとき、利害の絡む議論では私の英語ではだめだと痛感し、しばらくNOVAに通ったことがある。あまり進歩しなかったが努力はした。

「国家の品格」の著者である藤原正彦氏は海外経験の長い人にありが

ちな愛国主義に傾倒した人である。その著書の中で、彼は、国際人になるためには国語をしっかり学ぶことであり、表現する手段よりも表現の内容を高めることが大事であるから下手に小学校から英語を教えることは日本を減らすことになりかねないと主張している。彼はまた、例えばイギリス人には人を試すところがあり、教養がないとわかるとビジネスにも加われないといっている。こう言われてみると、私がトロント大学に入って数日後に、いきなりある人からいくつもの質問を受けたことを思い出す。「日本には何万トン以上の船は何隻あるか」、「俳句の神髄はなんぞや」などである。まるで答えられなかったこともあったに違いないが、彼はその後、親切につきあって世話をしてくれたので最低限のことだけはパスしたのだろう。藤原氏は、昔の日本人が英語をしゃべれなくても欧米の人たちは「この人はどこかになにか奥深いものを持っているに違いない」と思ってくれたが、最近の若者は、英語はべらべらしゃべるが内容がないから中身が空っぽであることがばれてしまうと言っている。

藤原氏の言うことには学ぶべきところがたくさんあり、鋭い指摘が多い。しかし、彼自身海外経験が長くて英語にはなんの苦勞もない人であり、そういう人が言うことを国際経験に乏しい人がまともに受けてしまうとえらい目に遭うに違いないし、藤原氏の意図するものとは異なる変な国粹主義に陥ってしまう。たしかに話す内容は大事だけれども、話す手段を欠くとこれまた受け入れてくれない時代である。私は彼の主張を読んだとき、本学の教務委員会で大学院入試の英語にTOEFLやTOEICを採用しようという提案があるたびに賛否両論が出ていつも提案がつぶれ、英語が専門でもない教員が未だに苦勞して問題を作成、採点している現状を思い出した。反対意見の論拠は、この英語の試験では単に英語力を試しているのではなく、論理力や専門性も総合的に試しているということにある。その通りかもしれないと思うが、それは専門試験で問えばよいのであって、英語の試験では英語力を試すのが本筋だろうと私は思っている。TOEFLは英語能力を客観的に正確に評価してくれるし、それに対して準備することは単に実務英語に限らず真の英語力の向上に大いに役立つと思う。

さて、話が飛んでしまったが、本学が国際的になってきたかどうかという問いかけには、なってきたと答えたい。しかしゆっくりと。農学研究科の建物に英語表示ができたのはごく最近であり、京都の地下鉄や市バスで英語のアナウンスメントが始まったときもかなり遅れている。こういうことはつまらないことと軽蔑すべきではない。日本語が良くわからないものにとって英語表示は大切である。カナダやアメリカの大学院では入学式や入学試験などというものはなく、またガイダンスなどは全くない。大学院生になるのは指導教授



タイ北高地におけるイチゴ栽培（筆者左端）

との個人契約的な面があるから、どういふ講義をどのくらいとるか最初には指導教授やアドバイザーなどの面談で決められる。一般的なことについてはいわゆる便覧に書かれてあり、学生は自分の責任でそれを読んで対応しなければならない。だから便覧は学生にとってバイブルであり、正確かつわかりやすく書かれていなければならない。10数年前に農学研究科の英文便覧の編集を依頼されたことがある。このとき、農学研究科は大学院大学として部分的に発足したばかりで誰もシステムそのものをきちんと理解していなかった。だからそれまでの便覧の原稿は英語だけでなく、日本語でもほとんど役に立たず、ほぼ全面的に書き変えなければならなかった。このとき私がまとめた原稿は英文校閲に出すべきものであり、当然、学部への責任と出費でやってくれるものと思っていたら、当時の学部長にそんなことはおまえがやれと言われてしまった。わずか10年前にはその程度の認識しかなかったのだと思う。

今では国際交流室でもでき、ずいぶん動きが良くなってきた。しかし、日常的に外国人研究者や留学生の面倒は個々の担当教員が責任を負わなければならない。日本語という特殊な言語をもつ我々がグローバル化に対応するには宿命的なハンデを背負っている。しかしやるからには国はもっと予算をつぎ込む必要がある。私は留学中、トロント大学のオープンフ

ェローシップをいただいた。しかしそれだけでは生活費の2/3くらいしかまかなえなかったもので、あとは毎年、ティーチングアシスタント(TA)を2コマずつやった。留学生も含めはすべての院生がTAをやっていたし、それは大学院生にとってしんどくても生活する上で不可欠であり、また貴重な経験にもなった。実験の材料や教材はすべて提供されたが、実験指導・採点などは院生にすべて任されていた。英語が下手な日本人だからといって講義でもTAでも決して特別扱いはしてくれなかった。しかしなんとか期待に添うように懸命に努力し、またそれに見合うお金はいただいた。今、日本の大学がやっているTAは北米のシステムを真似た形ばかりのものにすぎない。これでは教員にとっても楽にはならないし、院生にとってもあまり飯の種にも経験にもならない。また、日本人学生への奨学金の支給は減少傾向にある。ちなみに北米では返還を伴う奨学金はscholarshipとはよばない。それはloanである。文科省の留学生に対する奨学金などはずいぶん長い間改善されていないが、それなりに恵まれたものではある。客員教授のサラリーは破格に高い。われわれは、留学生や客員教授などの方々を温かく迎え、親切にお世話するとともに、同時に彼らに甘やかすことなく、それに見合う学業や研究・教育の実施を求めなければならない。そうすることによってはじめて身のある国際交流ができると思う。

交流の歩み (37)



YAPAN

Jonathan B. Laronne

Guest Professor

(Ben Gurion University of the Negev)
Israel

Japan is pronounced 'Yapan' in Hebrew, the 3,000 year Jewish language of Israel, from where I came to join the Laboratory of Erosion Control with Professor Takahisa Mizuyama. Altogether 12 months in your country filled with unforgettable experiences: the incomparable gracefulness and courtesy, the endless respect for the other – be he or she older or younger, the exquisite and tasteful handwork and artistry, the unrivaled good manners, most specifically where they deal with human lives – on the road while driving, and the delicate food flavors – these and more have not only been the first and strongest impressions in Japan, but they have already affected on us and our outlook on life.

Fluvial geomorphology and rivers, their nature and stability, is my profession. It is rooted between geology and physical geography, civil, agricultural as well as forest engineering. Kyoto's vibrant Japanese culture engulfed the research and teaching at Kyoto University: be it the many infinitely delicate and culture-bathed gardens of shrines facing the 'wild' mountains, its plethora of old-time housing and narrow, canal-lined streets and its overwhelmingly large number of restaurants serving Japanese food to its noblest, all internationally acknowledged. Living above Kyoto midway up to Mt Hiei in the small village of Hieidaira, we enjoyed the quietness of home and the proximity to the Faculty of Agriculture and to Kyoto at large. Living in the home of Michiko-san and Prof. Minoru Fujita, who were first to bestow upon us Japanese hospitality, the life in the tranquility of the mountain air, cooler than Kyoto in summer though still colder and snowier in winter, little-Hieidaira was big in surprises: finding friendship not only with the Fujitas, but also with Ari & Mariko Ide as well as other families, who allowed us to deep into Japanese life.

Upon arrival Michiko Fukuda from the lab came to greet us at Kansai; she helped at every instance as did Assistant Professor. Katsuko Morita and Associate Professor Miki Akamatsu from the International Office of Kyoto University. This office conducted trips to traditional thatched roofs, encountering the manual pounding of soba, visiting a Japanese industry with the world-renown automation and monthly preparing national foods with international students.

Friendly, almost human-like contact is not only made with people but also with nature. Undertaking research-related field trips to a diverse riverine landscape of Japan, hosting was done by Professor Mizuyama and staff from the Ministry of Land, Infrastructure and Transport. It was privileged to gain new friends - Japanese rivers: the Abe, Osawa, Yotagiri,

Joganzi (and Hitotsu-tani), Nishi-takiga-tani (and Sumiyoshi), Hirudani and soon the Uono-gawa. More interesting research-wise and surprisingly active is the Ashi-arai-tani, located in proximity to the Hirudani and both under the modern monitoring capabilities of the Kyoto University's Disaster Prevention Research Institute in the Hodaka Mountains. Walking the Ashi-arai-tani, perfecting the acoustic hydrophone principle with the superb team of Mr. Michinobu Nonaka and professors Toyoaki Sawada, Yoshifumi Satofuka and mainly Takahisa Mizuyama, was the culmination of the experimentation, not the least the climb to the Yake Dake volcano.

It was the professors who opened new avenues of research, thereby providing the 'icing on the cake': Professor Masaharu Fujita on the role of riverbed packing, Professor Ken Kosugi on forest hydrology, Professor Yoshifumi Satofuka on debris flow mechanics, and Professor Toyoaki Sawada and his vast knowledge of and hospitality to the Hodaka Mountains. Professor Takahisa Mizuyama and I began our contact more than a decade ago after having met in Oslo at a conference. It was with him and his invaluable time that I toured a large number of sites throughout Japan to become acquainted with SABO technology and specifically with our mutual interest to develop the Japanese acoustic principle to monitor river bedload. He introduced me to colleagues at conferences, meetings and field trips, arranging a variety of academic activities, including the participation in flume experiments in Tsukuba and presentation of joint research results at an international conference in Europe and at a national conference. The perfecting of this monitoring technique is essential not only in Japan, where very large fluxes of sediment cause rivers to deposit their load, raising the elevation of their beds and thereby causing dangerous flooding. Indeed, the Japanese acoustic monitoring system is but one of several presently being developed, but due to its simplicity, accuracy and modest price may become the most prevalent bedload monitoring tool worldwide.

Thank you Takahisa Mizuyama and all others for the pleasure to have taken part in research, teaching, meetings and having had the opportunity to appreciate marvelous Japan. Hebrew is an old-new language and the term "shalom" has many meanings: it is good bye, which I now say to you, but it also means Konichiwa, with the possibility of returning to your country for additional prying into the monitoring of bedload. Relevantly to these troubled times in our globe and in the Middle East, in the Arab neighboring countries and in Israel we respectively say: may peace be with you "salaam" and "shalom".



Photo taken during the field trip to the Abe River; from left: Professor Takahisa Mizuyama, Miss Miwa Yamaguchi, Jonathan and Cecilia Laronne at the infamous tea plantations above Shizuoka.

留学生の眼 (26)



My small dream in my small heart

Hag Ibrahim, Rashid Ismael

(Division of Environmental Science
and Technology
Republic of the Sudan)

Around 30 years ago, it was the first time for me to hear the name Japan! I was an elementary school student. Then the name turned so familiar due to many reasons; the wide and sudden spread of stereo-tape recorders and radios from National and Toshiba, then Toyota and Nissan cars!

A few years later I was taught about the WWII; World War II, and how the Americans used, for the first and may not be the last time, the Atomic bombs in the war and they dropped one in 6th of August at Hiroshima leaving nothing but the ash of the city and 140,000 dead, while the other was dropped three days later on 9th of Aug of 1945 at Nagasaki with the same result and 70,000 dead.

Those few words by my teacher remained unforgettable in my mind all those years. I have never dreamed of visiting Japan, due to the far distance between my Sudan and Japan. Even though, there was a small dream and deep in my small heart; if I have got a chance to go to Japan, the first thing I will do is to visit these two cities and see how cruel the humans could be, and to see also the other face of science, which we experience almost everyday as wars in Africa, but the bright face of science for us, African was more than good as fights against diseases, more crops to feed and fight the hunger and poverty of people and changing life to better conditions.

From time to time the news used to come out with this annual memorial of the Atomic bombs of Hiroshima and Nagasaki, which kept the blood stream run in my small dream that settled deep in my heart.

Then life has changed dramatically after spending three years out of school and doing hard hand-works. Then go back to school with much more eager to study and continue through university to the graduate school. During my studies in the graduate school and through the newly introduced and less trusted internet, my application for a short course in the ICGEB was accepted, but I had to support my flight, which was a big task. Finally I did it with the help of friends. That was to meet the Professor from Japan, Professor Masahiro Sugiura to whom I send my sincere gratitude, as one

of the lecturers during the course and we had some time to talk about science interests.

At that time my dream has grown a little bit big; due to the hope someday I might be able to visit Japan. Two years later I had a normal mail contact with him that lead to my application for Monboshō at the Japanese Embassy in Sudan with the help of Professor Jun-Ichi Azuma and Dr. Masahiro Sakamoto, to both I deeply indebted. My dream had really grown fast as if just a child transferring from childhood to adulthood! Then the day had come.

I came to Japan and decided to make my dream come true; to visit Hiroshima and Nagasaki and I did in two successive years. What I have seen there was much more than my brains' small capacity during the first lesson I had when I was a child and much more than what I have read through my studies and reads about Hiroshima and Nagasaki.

The two times I had spent in the Museums of the Atomic bombs were just like living the same moments again, which will never be the same feelings, but the deep sorrows I had and the tears kept coming down that I didn't realize until I was out of the museum.

To tell what I have seen there is just a nonsense repeat, but what I have felt, words can never describe.

Just last week, I did remember my small dream that was in my small heart, but this time, it was not small at all, it was a real, and my heart was full of sadness. The images I have seen in the Museums of the Atomic bombs as a very small symbols of what had happened 62 years ago will remain forever in my mind, as a symbol of how science and humans could be so cruel.

I wished if both cities were kept as they were, to give the easy forgetting humans a big lesson about their cruelty.

◆ 特別講演会 ◆

2007年9月12日(水) 14:00~16:30

Dr. Andrzej W. Lipkowski (ポーランド科学院医学研究所・教授)
"Antimicrobial Peptides and their Analogues
-New Hope for Medicines?"

Dr. Malcolm Fitz-Earle (キャピラノ大学・名誉教授)
"Minimizing Conflicts between Bears, Other Wildlife and
Humans in Agricultural Environments"

2007年10月11日(木) 10:30~12:00

Dr. Vilas M. Salokhe (アジア工科大学・教授)
"Current Situation of Agricultural Engineering Research and
Development in Selected Asian Countries"

◆ 外国人客員教授 ◆

平成19年4月~平成20年3月、外国人客員教授として下記の6名の先生方を招聘しています。

氏名: **Chandrasekera Mudiyanelage Madduma Bandara** (スリランカ)
招聘期間: 平成19年4月1日 ~ 平成20年3月31日
所属・職: スリランカ・ペラダニア大学・主任教授
研究題目: 持続的地域発展のための熱帯農業地理学研究
受入教員: 地域環境科学専攻・比較農業論分野・遠藤 隆教授(兼任)

氏名: **Malcolm Fitz-Earle** (カナダ)
招聘期間: 平成19年7月1日 ~ 平成19年9月30日
所属・職: キャピラノ大学・名誉教授
研究題目: 数理モデルによる野生動物および害虫管理の解析
受入教員: 地域環境科学専攻・生態情報開発学分野・高藤見雄教授

氏名: **Andrzej W. Lipkowski** (ポーランド)
招聘期間: 平成19年7月1日 ~ 平成19年9月30日
所属・職: ポーランド科学院医学研究所・教授
研究題目: 食品成分の新しい生理作用
受入教員: 食品生物学専攻・食品生理機能学分野・吉川正明教授

氏名: **Vilas M. Salokhe** (インド)
招聘期間: 平成19年7月2日 ~ 平成19年12月28日
所属・職: アジア工科大学・教授
研究題目: 土壌付着防止のためのバイオメテイクスに基づく作業機の表面特性変更に関する研究
受入教員: 地域環境科学専攻・農業システム工学分野・中嶋 洋准教授

氏名: **Zaki Anwar Siddiqui** (インド)
招聘期間: 平成19年10月1日 ~ 平成20年9月30日
所属・職: アリガルフ マスリム大学・助教授
研究題目: ナラ・カシ類とマツ類の成長と萎凋病に及ぼす菌根菌と植物成長促進根圏細菌の影響
受入教員: 地域環境科学専攻・微生物環境制御学分野・二井一禎教授

氏名: **Pavel Barsukov** (ロシア)
招聘期間: 平成19年10月1日 ~ 平成20年9月30日
所属・職: ロシア科学アカデミー・主任研究員
研究題目: ユーラシア寒冷地域における土壌有機物動態の解析
受入教員: 地域環境科学専攻・土壌学分野・小崎 隆教授

農学部国際交流ニュース

農学部国際交流推進後援会の会員加入について

平成19年の会員加入のお願いを7月に御案内いたしました。本年も学内および学外の多くの方々(8月末日現在で126名、2団体)からご賛同をいただいておりますが、会員は年々減少しております。引き続き随時受け付けておりますので、よろしくご厚意申し上げます。

新入留学生オリエンテーション&歓迎パーティー

19名の新入留学生を迎え、4月6日(金)午後4時~5時、国際交流室においてオリエンテーションを行いました。その後、生協カフェテリア「ほくと」において、奥村研究科長、遠藤副研究科長、伏木副研究科長、縄田国際交流委員をはじめ多数の教員、職員、在学中の留学生などの出席により歓迎パーティーを開催しました。総数80名余りの参加者があり、新入留学生の自己紹介など楽しい交流会となりました。

バス一日研修

農学部のスクールバスで年に2回春と秋にバス一日研修を行っています。今年度春は5月17日(木)に、京都府綾部市にあるゲンゼ(株) 博物苑・記念館、花伝院(梅干しの製造)、本田味噌(株)に行きました。客員教授1名、招聘教授1名、留学生16名が参加し、新緑を眺めながらの楽しいバス研修でした。日本の伝統食である梅干しや味噌の製造過程を興味深く見学し、多くの質問がありました。

サッカー&バーベキュー大会

恒例のサッカー&バーベキュー大会も第6回目を迎え、今年度は6月30日(土)に行いました。今回は農学部グラウンドを全面使用して、一度に2ゲームを行うことができました。梅田教授、小林准教授、木下助教授の指揮の元で午後1時~4時30分まで存分に汗を流し、ゲームを楽しみました。今年は特に例年以上の多数の参加者があり、留学生の希望どおり国別対抗を行う事ができました。梅雨の最中にもかかわらず晴天に恵まれ、サッカー後のバーベキュー大会も大いに盛り上がり、良い交流会になりました。ご協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。



新しい国際交流室担当教員 「三宅 武 准教授」のプロフィール

平成19年4月1日付で、本学農学研究科応用生物科学専攻から三宅 武氏(写真)が、国際交流室担当准教授として着任されました。

三宅氏の御専門は統計遺伝学で、統計遺伝学的解析法に基づいてさまざまな家畜の遺伝的多様性を明らかにし、有用な遺伝

資源を発見・保存・活用していく研究を進めておられます。また、今年度から、学部生の情報処理教育を御担当されています。スイスに長期間留学しておられましたので、国際感覚を身につけておられるとともに、英語もご堪能で、ワインがお好きです。国際交流室の活動にも積極的に取り組んで下さっています。御本人の言葉を以下に御紹介いたします。

「国際交流室業務のお手伝いをさせていただけることになりました。国際交流についてしっかり学んでゆきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。」

同氏の今後の御活躍を大いに期待いたします。

赤松美紀 農学部国際交流室・准教授

私費外国人留学生の大学院修士課程入試の結果

8月21日~23日にかけて、平成20年度大学院修士課程入試が実施されました。その結果、応用生命科学専攻1名(中国)、地域環境科学専攻1名(中国)の方々が私費外国人留学生として合格されました。

短期留学推進制度

平成19年度の短期留学推進制度(派遣)には応募者がありませんでした。

見学旅行

7月26日(木)~28日(土)の日程で、徳島県(大塚化学栽培研究センター他)、香川県(金刀比羅宮他)を訪問、見学しました。参加者は留学生15名、日本人引率学生2名、引率教員3名でした。今年初めて全行程を貸し切りバスとしました。1日目の大塚化学栽培研究センターでは、ロックウールを用いた新しい栽培方法によるトマトや花の栽培を見学しましたが、留学生達は熱心に沢山の質問をしていました。2日目は、金刀比羅宮へ785段の階段を上って本宮に参拝。また、現存する日本最古の歌舞伎小屋(金丸座)を見学し、築城400年を誇る丸亀城では、美しい石垣を眺め、天守閣に登り瀬戸内海の景観を楽しみました。3日目は、伝統的な日本庭園である栗林公園を散策後、瀬戸大橋を渡って帰京しました。梅雨明け直後の晴天に恵まれ、留学生達は、大いに日本の文化を学び楽しむとともに、大勢の友達と沢山の思い出を作ることができました。

世界の料理講習会

第22回中国新疆料理 4月24日(火)

講師: Guliner Maimaitiさん(生物資源経済学D3)

第23回韓国料理 5月29日(火)

講師: 趙 庸祺 先生(招聘研究者)

第24回アルゼンチン料理 6月17日(金)

講師: Perez Goodwyn, Pablo博士(学術振興会研究員)



大塚化学栽培研究センター



バーベキュー大会

◆日本語教室の先生交代・日時・場所変更

これまで日本語教室で留学生に日本語を教えていただいた福本和代先生が3月で退職されました。福本先生、長い間本当にありがとうございました。4月から福本先生に代わって日本語教室の先生として、渡部真理先生に新しく来ていただいています。各クラスの日時・場所も下記のように変わりました。

- ・上級クラス 毎週火曜日13:00-16:00
- ・中級クラス 毎週水曜日13:00-14:30
- ・初級クラス 毎週水曜日14:45-16:15 (W-502講義室または j-Pod *)

◆プレカウンセリング室のスタッフ交代・日時・場所変更

農学部国際交流室では、留学生が孤独感、研究上のプレッシャーなどを解放できる場としてプレカウンセリング室を開設していますが、4月から下記の通りになりました。日本語教室の渡部真理先生が待機しておられます。

- ・毎週火曜日10:00-12:00 (W-502講義室または j-Pod *)

* 間伐材を用いた新工法のモデルハウス(旧演習林事務棟横)

発行所 京都市左京区北白川追分町
京都大学農学部国際交流室
電話 (075) 753-6320,6298 e-mail : fsao@kais.kyoto-u.ac.jp

印刷所 京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町98-2 戸田ビル3F
有限会社ディーエスピー
電話 (075) 706-6270